

序 論

- クリスチャンとは、
 1. イエス様の十字架と復活によって「罪の世界である世から救われ」た人々である。
 2. しかし、同時に、その同じイエス様によって、使命をもって「この世に遣わされた」者である。
 3. その使命とは、神の栄光を表し、また世の人々の救いのために、証し人、世の光、地の塩となることである。
 - 即ち、クリスチャンは、「この世から離れてはならない。むしろ、この世のど真ん中に生きるべき」なのである。
 - 「世に生きるクリスチャン」とは、どんなクリスチャンなのか？ どのように生きるべきなのか？
 1. それを学ぶために、旧約聖書の人物、ダニエルとその友人たちの生き様から数回に亘って学んで来た。
 2. 彼らは、紀元前6世紀にバビロニア帝国、ペルシャ帝国の専制君主たちのお膝元、異教世界・異教政府のど真ん中で信仰者(今で言うクリスチャン)として影響力ある人生を生きた人々であった。
 - 更に、先週からは、その学びの続きとして、同じく旧約聖書の「ノア」の生涯について学び始めた。その理由は、
 1. 彼もまた、この世のど真ん中で神の証し人、人々の救いの宣証者として生きたモデルであったからである。
 2. 聖書は創世記6章の初めの部分で、ノアが生きていた時代の様子をこのように語っている。
 - (1)それは、性的に倒錯、混乱していた時代
 - (2)暴虐に満ちていた時代
 - (3)神の前に墮落していた時代、とある。
 3. そして、9節は言う。「ノアは正しい人であって、その時代にあっても、全き人であった。ノアは神と共に歩んだ」と。
 - (1)ノアは、正しい人、全き人、神と共に歩んだ人であった。
 - (2)しかし、そのような歩みを、「その時代(ただ中、ど真ん中)にあって」実践したのであった。
 - (3)だから、彼は、同様にこのように生きる私たちが学ぶべきモデル的存在なのである。
-
- ノアの物語のメイン・フレーム、メイン・テーマは、大洪水による「神の裁き」である。
 - 今は、何でもポジティブ思考で、ネガティブ思考を嫌う時代である。だから、よく言われることは、「叱るより褒めろ」である。
 - 私も基本的にそのような考えに賛成である。しかし、それは程度の問題、バランスの問題である。私には、しばしば、ポジティブを強調するこの傾向が行き過ぎているように思えることもある。
 - 物事には、すべて2面がある。プラスがあればマイナスもある。上もあれば下もある。上昇もあれば下降もある。YESもあればNOもある。緑の信号もあり、赤信号もある。即ち、GoもありStopもある。その両方があるからこそ、物事が成り立つのである。両方が必要なのである。
 - しかし、うっかりすると、現代は、その片方だけ、ポジティブな面だけで物事を進めようとしていることを多く見かける。
 - マイナスを、失敗を、叱られることを経験してこそ人は強くなることを忘れてはならない。褒められることは確かに素晴らしい。励ましになる。それによって成長が促進もする。しかし、うっかりすると、それは、「もやし」のようなひ弱な表面的な成長である。本当の芯からの強さと成長は、人生のマイナス、ネガティブを経験してこそ自分のものになる。
 - 聖書は、神様も私たちを愛するがゆえに、私たちをポジティブな祝福と共に、ネガティブに見える人生の試練と訓練に遭わせられると言う。「霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さに

あずからせようとして、懲らしめるのです」(ヘブル12:10)と。

- しかし、現代の一般的傾向は、このような人生の試練や訓練、懲らしめを、「ネガティブ」なこととして、あまり重要視しないことである。
- そんな時代にあっては、ましてや「裁き」などという概念は、多くの人にとって、とんでもないことであり、考えられないテーマ、暗すぎるテーマである。
- 「裁き」は、訓練や懲らしめを超えて、ある意味で「ネガティブ」なテーマの骨頂である。
- 聖書は、この「裁き」についてどのように言っているのか? 「ノアの物語」は、まさにその「裁き」、神様による人間の「裁き」のストーリーである。
- キリスト教の神は愛なる神であり、裁きなどというイメージとはおよそ違う。裁きはむご過ぎる。残酷である。そんなことを神様がするはずはない。神様がそんなことをするなどと信じたくないと考えている人は少なくない。
- しかし、私たちが自分の感情と自分の思いで、聖書の気に入ったところだけを Selective に信じるのでない限り、「裁き」は、明白に、否むことのできない聖書のメッセージである。
- そこで、「ノアの生涯」からのメッセージとして、今日学びたいことは、私たちクリスチャンが「神の裁き」をどのように受けとめるべきかである。

本 論

1. 第一に学びたいことは、「神の裁き」の「正当性」である。即ち、クリスチャンは、神様の「裁き」は、不当で残酷なものではなく、「正当」なものであると認識する必要がある。なぜ、そのように言うことができるのか?

A. 第一に、「裁き」という概念は、人間の生まれつき心底に持つ理性と感情に合致している。

1. 昔から日本には「勸善懲悪」「天罰」という言葉があるように、私達の心の奥底には「悪は、いつの日か必ず懲らしめられるべきである。天がこれを見逃さない」という意識がある。
2. 人に対して、社会に対して、悪や不正をなす、ましてや、惨たらしい、残酷で非常なことをしたら、その人は必ず報いを受けなければならない、という感覚・思想は、人種、文化、時代を超えて、世界中万民が理性的にも、感情的にもうなずくものである。
3. だから、私たちが、これに反するような、テレビや映画のドラマを見たり、更には、実際の事件にぶつかると、怒りや不満を覚えたり、どこか納得できないと感ずるのである。
4. このような JUSTICE 正義・公正の感覚がなくなったら、この世界は無秩序と混乱しかない。CHAOS である。だから、私たちの社会には、警察が、裁判所が、刑務所が必要なのである。それは、個人と社会の正義を守るためである。
5. しかし、それら、この地上社会で正義を守る機関には限界がある。間違っただけの人々を間違っただけで裁くことさえある。それゆえ、私たちの心の中のどこかに、それを最終的に裁く究極的、絶対的「神の裁き」に対するの信仰ともいうべき期待と恐れがある。

B. 第二に、クリスチャンが神の裁きを正当なものとするべき根拠は、「神の裁き」こそが、「福音」の「基本」であるからである。

1. 「福音」とは、イエス様が私たちの罪のために十字架にかかり、死んでよみがえってくださったことである。
2. 罪のないイエス様がなぜ十字架につかなければならなかったのか? なぜ、救いのために十字架なのか? 他に救いの道はなかったのか?
3. 「十字架」は、当時、「惨たらしさ」の象徴であった。だからこそ、即ちその惨たらしさのゆえに、たとえどんなに重罪を犯したとしても、「ローマの市民権」を持つ者に十字架刑は課せられなかった。
4. しかし、その惨たらしさの骨頂である十字架刑に、罪のない御子が処せられることを父なる神は求められ、許されたのである。
5. ご存じのように、イエス様の十字架は、私たちの罪に対する「神の裁き」を、私たちの身代わりに受けるためであった。
6. 神は、聖にして義なるお方として私たちの罪をそのまま裁かずにおくことはできなかった。

- (1) 私たちの犯した罪の刑罰をウヤムヤにごまかすことはできなかった。
 (2) それは不正をのさばらせることであり、混乱をもたらすだけであり、
 (3) 聖にして義なる支配者、統治者としてはできないことであった。
7. しかし、同時に、神は、愛なるお方として、私たちの罪のゆえに、私たちの上に降りかかる罪の呪いを何とか取り除き、赦したかったのである。
8. そのジレンマの答えが、十字架であった。その意味で、あの十字架は、神様の妥協なき「裁き」と「赦し」の交差点なのである。
9. 愛の神は確かに私たちの罪を赦した。しかし、その赦しのために神はご自身の聖にして義なるお方としての罪に対する「裁き」を決して曖昧にしたり、妥協されることはなかった。
10. 即ち神様は聖なる神としてイエス様を十字架の上で徹底的に罪人として裁かれたのである。
 (1) 御子イエス様ご自身は無実であった。
 (2) しかし、十字架で私たちの罪を身代わりに背負った救い主イエスは、義なる神として、「裁かれ」なければならなかった。
 (3) イエス様はあの十字架の上で、「わが神、わが神、何で私をお見捨てになったのですか?!」と悶絶の叫びを挙げられた。それは、裁かれ、呪われた罪人の叫びであった。
11. 即ち、もし、私たちの神が、裁きの神でないなら、イエス様の十字架は必要なかった。
12. しかし、必要だったのである。もし、イエス様の十字架がなかったら、「私たちは、本当にこれで良いのか、これで神様に赦されているのか、天国に行けるのか、と言う不安の中で生きなければならなかった。
13. しかし感謝すべきかな、イエス様の十字架で私たちの裁きが完全に終わったからこそ私たちは今主の前にも、永遠の前にも平安を持つことができるのである。これが福音である。

II. それでは、この神の裁きに対して、クリスチャンはどのような態度をとるべきなのか？

A. 神様の裁きの事実を厳かに受け留めて毎日を生きる。

1. パウロは言う（Ⅱテモテ4章1節）：神の御前で、また生きている人と死んだ人とを裁かれるキリスト・イエスの御前で、その現れとその御国を思って、私はおごそかに命じます。
2. ヘブル人への手紙の著者も、このように言う。「人間には、一度死ぬことと、死後にさばきを受けることが定まっている」（9：27）。
3. これらの御言葉が、私たちに伝えようとしていることは、「神様の裁きを意識した生活」「神様の裁きを厳かに、真剣に受け止める人生」の重要性である。
4. 私たちは、毎日の生活、人生の中で、どのくらい、自分自身のために、また周囲の愛する人々のために、「私たちは、やがて神様の前に出て、その御前に裁きを受けるのだ」ということを意識し、厳かな気持ちで生きているだろうか。
5. 多くの方は、「やがて神様の前に立って裁かれる」ということをネガティブな面にだけ捉えてしまい易い。しかし、それは反面の事実であり、ポジティブな面も見なければならぬ。
- (1) パウロのⅠコリント4章3－5節の言葉を見て頂きたい。（引用）
 (2) そこで、彼は言う。私は、人の裁きの言葉、評価や評判に振り回されることも、自分で自分を裁くこともしない。ただ、唯一の正しい裁きをなさる神の裁きをのみ待つと。
 (3) 司法制度を始め、会社にも、学校にも、私たちの生きている社会には、様々な「裁き」がある。その中には、正しくない、不公平な裁きが一杯ある。
 (4) しかし、感謝すべきかな、人の社会では、決して期待できない公正な評価と報奨を与えるべく、私たちが正しく裁かれる神様がおられるのである。
 (5) 私たちはこのお方の前に生きているのである。だから失望が無いのである。むしろ楽しみなのである。
- Ⅱテモテ4章8節：正しい審判者なる主がそれ(義の栄冠)を私に授けて下さるのです。
 - マタイ25章21、23節：その結果が5タラントであれ、2タラントであれ、見えるところの出来高でなく、内面的忠実さを見て公平に評価なさる神様をそこに見る。

B. 「裁き」は神様に委ねて、愛に生きること。

1. ローマ12章19-21節：2:19 愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。」12:20 もしあなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。渴いたなら、飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです。12:21 悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい。
2. マタイ7章1-5節：7:1 さばいてはいけません。さばかれないためです。7:2 あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。7:3 また、なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。7:4 兄弟に向かって、『あなたの目のちりを取らせてください。』などとどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか。7:5 偽善者たち。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。
3. すでに見たパウロの言葉のように、ここでも言われていることは、
 - (1) 第一に、人間が人間を裁いてはならないことである。
 - パウロが言っているように、私たちは、自分自身をさえ正しく評価し、裁くことができない。
 - それゆえ、他人のことをたやすく裁いたり、更には、そのために自分たちの手で個人的に何か制裁するようなことをしてはならない。
 - (2) 第二に、むしろ、その人々に向かって「愛の行為」「愛の攻撃」「愛の報い」をなすべきである。
 - 多くの人は、このように言う、「私にはそんな愛の行為などできません」と言う。
 - その通りである。しかし、その第一歩は、「祈り」から始めることである。そこからすべてが始まる。愛の第一歩は、その人のための祈りから始まる。
 - 一人のクリスチャン男性が路傍で伝道していた。そこへ、一人のキリスト教に反対する男性がやってきて、「お前は本当にキリスト教を信じているのか？もし本当なら、もし今俺がお前の右の頬をなぐったら、左の頬も殴らせるんだな（マタイ5章39節）」と路傍伝道をしている男性に言って、いきなり殴ってきた。殴られた青年はそこに倒れたが、周りの群衆が見つめる中、痛そうに頬をかばいながら起き上がると、その青年は、「今度は、私の番です！」と言ったかと思うと、右手を大きく振りかざして、大声で「神様、この人を赦してください。あなたが真の神、救い主であることを教えてください」と祈り始めたという。

C. そして、最後に、私たちクリスチャンが、「神の裁き」という事実の前に取るべき態度は、「伝道」である。

1. もう一度、Ⅱテモテ4章1節、更に4節まで見たい：神の御前で、また生きている人と死んだ人とを裁かれるキリスト・イエスの御前で、その現れとその御国を思って、私はおごそかに命じます。みことばを宣べ伝えなさい。時が良くて悪くても、しっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。・・・。
2. 伝道は、ある意味で布教、即ちキリスト教を広める活動ではない。それは、むしろ、上述の「愛の行為」の究極であると考えべきである。
3. 私たちの愛の行為の究極は、私たちの一番の宝であるイエス様をその人にも紹介することである。
4. ましてや、やがてすべての人に来る最後の審判、裁きを思うなら、私たちは、真剣にそのことに取り組まなければならない。
5. 私たちは伝道、即ち、人々にイエス様を伝えたいたくさんの言い訳と理由を持っている。

パウロの時代もそうであった。しかし、その人々にパウロは言う。

- (1)2 節：時が良くても悪くてても
- (2)3-4 節：人々が好まない話であっても
- (3)即ち、どんな状況・時代・風潮であっても伝道する。
- (4)但し、寛容(2 節)をもって、即ち、謙遜に、
- (5)しかも、あらゆる方法、手段(2 節)をもってである。

結 論

- これらが、神の裁きの前にクリスチャンがとるべき生き方、態度である。
- 締めくくりに伝道することに関して一言申し上げたい。私たちは、よく、あまり熱心に伝道すると人を「つまずかせる」からあまり伝道しないということを知る。勿論、できる限りそれは避けるべきである。
- しかし、先ほども触れたように、伝道が最後の裁きと密接に関係づけられて理解されるとき、この「躓き」ということは注意して考えられなければならない。
- あまりしつこくていやがられ「躓かせて」しまうことも困ることである。しかし、こんな大切なこと、命にかかわることを言わないことは、単に「嫌がられるから言わなかった」ではすまされないことではないか？！
- 永遠の命にかかわることを伝えなかったことは、もっと深い意味での「躓き」を最終的には人々の心に残すのではないだろうか。
- 上品な老夫婦が休暇で旅行し、高級ホテルにチェックインして部屋に荷物を運び込むとき、夫人とボーイが先に、エレベーターで部屋に向かった。実は、そのボーイは最近イエス様を心に迎えて、クリスチャンになったばかりで心にはちきれんばかりの喜びをもっていた。彼は、部屋に行くまで、その夫人に夢中でイエス様のことを伝えたといい。その夫人が部屋に落ち着き、しばらくして主人が部屋に来た。その夫人は、さっきのボーイのことを印象深く主人に語った。主人は言った。「今度そのボーイが来たら、そんなこと話さないで、自分のすべき仕事をしなさい」と。するとその夫人は言った。「でも、あなた、あのとき、あのボーイの顔は、今彼がすべき仕事をしているという顔でしたよ」と。
- 勿論、私たちの伝道がすべき仕事、業務を妨げるようであってはならない。しかし、このような真剣な面持ちでの真実、誠実な伝道こそが、長期的な意味で人の心を真摯に打つのである。
- 神の前とその裁きを思いつつ、み言葉を宣べ伝える者でありたい。時が良くても悪くてても。